The original version of this VD has a mistake in it where Yuno says she's 16. This version is true to what it was in the original VD.

1|ミルグラム監獄内尋問室

薄暗い尋問室の中。
のんきに鼻歌を歌っているユノ。
ユノ 「～♪」
扉の外からコツコツと足音。
ユノ 「お。来たかな......ふふ」
イタズラっぽく笑うユノ。
まもなくガシャンと乱暴に扉が開く。
エス 「囚人番号2番ユノ。尋問を始め......」
部屋の中にユノが見当たらず、あたりを見回すエス。
エス 「......？どこにいった......」
ユノ 「わっ！！」
扉の裏に隠れていたユノ、エスの後ろから驚かす。
動じないエス。
エス 「......何をしている」
コノ 「あれ～。看守さん、リアクションうっすいなぁ。もっと驚いてよ～」
エス 「......さっさと座れ。尋問を始める」
ユノ 「は～い....」
椅子に座るユノ。
目の前に立つエス。
エス 「ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適切な判断をくだすために存在している。そのためにいくつか話をしよう」
ユノ 「おっけー。話そ話そ」
エス 「......まず」
言いかけたエスを遮る楽しげなユノ。
ユノ 「まず自己紹介とかしとく？カシキユノ。16歳。高校生。9月2日生まれの乙女座のO型」
エス 「......ストップ、ユノ」
ユノ 「なになに？」
エス 「質問はこちらからする」
ユノ 「どうぞどうぞ～」
咳払いをし、続けるエス。
エス 「シン囚人としてミルグラムに囚われて数日というところか。率直に、どうだ？監獄生活は」
厳粛な雰囲気を作ろうとするエスだが、ユノは取り合わない。
コノ 「んー？意外と楽しいよ。家族がどうしてるかなぁって心配はあるけど......不思議体験って感じで」
エス 「楽しい......か......」
ユノ 「そうだね、他の囚人の人たちもみんな面白いし、まだ色々探り合いって空気もいいね。そういう時期の人間観察ってやっぱり楽しいよね～？」
エス 「ユノ」
ユノ 「はいよ？」

まだ喋りそうなユノを制止するエス。
エス 「……緊張感がなさすぎる。尋問だと言っているだろう」
ユノ 「あぁ、看守さんったらムード大切にするタイプだ」
エス 「最低限は。お前の罪を許すか、許さないか、判断するための貴重な場だからな」
睨みつけるエスのことを意に介さず、笑顔で続けるユノ。指を3本立てて見せる。
ユノ 「緊張感がない理由は3つありま〜す。……聞きたい？」
エス 「……それを解決すれば真剣に取り組むんだな？」
ユノ 「ん〜。まぁ、そうなるかな？」
エス 「話してみろ」
ユノ 「3000円になりま〜す」
エス 「いいから話せ」
ユノ 「けち〜……まぁいいや。じゃあひとつめ。看守さんの見た目が全然怖くなくてむしろ可愛いから」
エス 「……はぁ？」
思いもしない回答に拍子抜けするエス。
ユノ 「おかしいでしょ。看守なのに。あたしと同じくらいの歳じゃない？むしろちょっと下くらい？」
エス 「……知らん」
あからさまに不機嫌になるエス。
ユノ 「ほらほら、無理でしょ〜。そんな可愛い顔で緊張感持てなんて」
エス 「……あぁ？」
普段以上に威嚇するように睨みつけるエス。
ユノ 「あはは、眉間にシワ寄せても無駄だって」
エス 「……大変不服で不愉快だ！それに反論もあるぞ」
ユノ 「ほうほう？聞きましょう？」
ビシッとユノを指差すエス。
エス 「僕が屈強な大男だったとして、暴力をもって支配しようとしたところでお前の態度が変わるとは思えないな」
エスの指摘に少し驚いた顔のユノ。
ユノ 「……たしかに！そうかも」
エス 「だろう？それはお前自身の気質の問題だ。よって僕の見た目は関係ない。まったく関係ない」
ユノ 「めちゃくちゃ気にしてんじゃ〜ん。まぁいいや。じゃあ第一問クリアってことで」
エス 「いつの間にクイズになった？」
ユノが指を2本立てて見せる。
ユノ 「あたしが緊張感のない理由ふたつめ。先に尋問から帰ってきたハルカがニッコニコしてたから！」
エス 「あぁ……」
頭を抱えるエス。
エス 「それは僕のせいじゃない……」
ユノ 「おかげでよっぽど楽しいことが待ってるんだと思って期待してたんだけどなぁ〜」
エス 「お前が帰るときは絶対に暗い顔で帰れよ」
ユノ 「ねぇねぇ。ハルカと何話したの〜？あの子をあんなにニコニコさせるなんてすごい手腕じゃない？」
エス 「僕は尋問での会話の内容を漏らすことはしない。だが、そうだな……僕が何をしたか教えてやろう。思いっきりビンタをお見舞いしてやった」

の歳
ユノ 「わーお！」
ニヤニヤするユノ。
ユノ 「それでニコニコで帰ってきたのか。そりゃハルカが変態さんだ。第2問もクリアかな……」
エス 「なんだか気づかないうちに、お前のペースに巻き込まれている気がする……」
笑顔を崩さないままのユノが、少し冷たく言い放つ。
ユノ 「みっつめ。看守さんに人を赦す.赦さないなんて決めれっこないと思っているから」
ユノの顔は笑顔のままだが、空気だけが変わっている。
ユノの言葉に眉をひそめるエス。
エス 「……聞き捨てならないな。僕の能力を疑問視しているということか？」
ユノ 「あぁ、違う違う。看守さんがどうこうってわけじゃないよ」
エス 「……詳しく聞かせてもらおうか」
不愉快を隠せないエスに対して、少し冷めた様子のユノ。
ユノ 「まぁ……システムを聞いたときからずっと思ってたんだよ。ここ、看守さんが有罪無罪決めるんでしょ」
エス 「そうだな」
ユノ 「看守さんの好き嫌いでしかないでしょ、それ」
エス 「……」
ユノ 「あんまり詳しくないけどさ、日本って法治国家ってやつでしょ？法律以外で良いとか悪いとか決めたらおかしくなっちゃうでしょ？」
エス 「ふむ」
ユノ 「例えばニュースとかさ～。不倫とか不適切発言とか不謹慎とかで騒いでるでしょ？同調した人たちも叩き始めるでしょ？……バカだなぁって思わない？法律以外で人が人を罰するなんてキリがないよ」
心底つまらなそうなユノ。
エス 「……一般論になるが法律も人が決めたものだ。すべての人間が納得する妥当性を得られるものではないだろう」
ユノ 「それ。自分が納得したいからって、無関係の他人に干渉してくる人が嫌いなんだよねー。それってマス……あー、ただ自分が気持ちよくなりたいだけじゃん？.....その人達は、結局何もしてくれないよ」
エス 「ユノ……」
ユノ 「あたしがどんなに寒い思いしてても、なーんもあっためてくれない人たちだよ」
どんどんトーンの堕ちていくユノ。
そんな自分にはっと気づいて笑顔に戻る。
ユノ 「へへ、話それちゃった！えーと、何が言いたいかというとね」
エス 「結局僕次第だと……」
ユノ 「そう。結局もう好みじゃん？まぁ別に良いと思うんだけど、潔くて！でも、看守さんがどう思うかなんてあたしにはどうしようもない。だから取り繕う意味がない。普段どおり楽しく過ごしているってわけ！」
あっけらかんとしたユノに、ため息をつくエス。
エス 「……なかなかクセモノだな、お前も」
ユノ 「そう？普通じゃない？」
エス 「良いだろう。お前がお前らしくいるように、僕も看守らしくやらせてもらう」
バッとコートを翻し、

エス 「ユノ。お前自身は自分の罪についてどう考えているんだ？」
ユノ 「え？」
エス 「お前のその感性をもってすれば何故自分がここに入れられたかはわかっているんだろう？」
少し考えたのちに、口を開くユノ。
ユノ 「......まぁ『ヒトゴロシ』呼ばわりされそうなことは一件ほど」
エス 「よろしい。では、お前はお前の罪をどう感じる？赦されるべきものか？赦されざるものか？」
ユノ 「んー......」
少し考え込むユノ。
あきらめたようにパッと顔をあげる。
ユノ 「......さぁ？わかんない。考えるのめんどくさいかなぁ」
エス 「考えろ」
ユノ 「うーん、ぶっちゃけ看守さんがさないならさないでいいよ」
エス 「赦されたいとは思わないのか？」
ユノ 「必死で謝ってまでは別にいいかな。自分のしたいことをした結果だから」
エス 「罪の意識はないのか？」
ユノ 「どうかな？それも考えるのやめちゃった」
エス 「......適当だな」
ユノ 「......世の中が真面目すぎるだけだよ」
問答を終え、納得したようなエス。
エス 「ユノ、お前はふざけているように見えて頭の良い人間だ」
ユノ 「......それはどうも？買いかぶりだけどね」
エス 「だが、それゆえか諦観している。自分にも、人間にも、社会にもすべてを悟って冷めた顔をしているな」
エスの言葉にあからさまに不機嫌になるユノ。
ユノ 「......へー、なに。お説教？精神論系のやつ？一番嫌いだよ？」
エス 「くくく......」
わずかに微笑むエス。
エス 「へらへらと空虚な言葉を吐いているお前より、今のイラついたお前の方がずっと好ましい」
ユノ 「......え？」
エス 「冷めたままでいい。ごまかさなくていい。僕の前ではな」
突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。
ユノ 「部屋が、変わっていく......」
エス 「尋問はこれにて終了。ここからはお前の記憶から生み出される心象を覗かせてもらう」
ユノ 「......歌で引き出す、って言ってたやつ？」
エス 「そうだ。お前の冷めた心も、適当な言葉も、何故そう至ったかも......すべて僕が突き止め、受け止めてやる」
ユノ 「看守さん......」
エス 「隠し事は不可能。ゆえに何も取り繕う必要はない。お前はお前のままでいればいい。ありのままのお前を、僕が身勝手に判断してやる。......それがミルグラムだからな」
ユノ 「なぁに、そのめちゃくちゃな理論......」
呆けていたユノ、目を閉じ微笑む。
ユノ 「でも、そうだなぁ。想像してみるとそれは......。ちょつとだけ......あったかいな」
ユノの肩に手を載せるエス。
エス 「囚人番号2番、ユノ。さぁ。お前の罪を歌え」